



Title	中村研一教授の経歴と業績
Author(s)	遠藤, 乾; Endo, Ken
Citation	北大法学論集, 62(6), 167-186
Issue Date	2012-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48741
Type	departmental bulletin paper
File Information	HLR62-6_006.pdf



中村研一教授の経歴と業績

はじめに

中村研一教授は、二〇一二年三月三日をもって本学を定年退職される。一九七二年に東京大学理学部、七四年に同法学部を卒業後、同法学部助手となり、一九七七年に北海道大学法学部助教授に採用された。爾来三五年にわたり、一貫して国際政治や平和研究などを講じられる一方、法学部長、理事、副学長、公共政策大学院院長などを歴任され、研究、教育、行政など多方面で多大なご貢献を積み上げてこられた。以下、順に振り返りたい。

一 研究業績

遠藤 乾

中村研一教授の研究上の魅力を伝えるのはそう簡単なことではない。その言説や人柄にじかに触れた者にはわかるようにも思うが、本丸の国際政治論はいうまでもなく、鋭利な現状分析から文学的なユートピアにいたるまで、刊行されたものの解説だけでは中村政治学の射程を伝えきれない。しかし、それでも出版されたものをベースにする他あるまい。ここでは、その研究上のふくらみを意識しつつ、出発点となった帝国主義研究、平和研究、地球的問題群、ユートピアと現状分析、市民向けの出版の五つの柱に巻きつける形で、業績を紹介したい。

1 帝国主義研究—グローバルな視座の出発点

中村研一教授の研究は、一面では、国際政治を帝国主義の理

論・歴史的観点から再構成する試みと位置付けられよう。正確には、いわゆる国際政治なるものが主権平等の下の国家間政治なのかどうか、世界大の中心⇨周辺構造を常に再生産しつづける帝國的な視点から問い直すものである。

未公刊の助手論文「海外進出とフロンティアの構造」（一九七七年）は、「一九六〇年以降に欧米（とくに英国）で行われた一九世紀的帝国主義と植民統治とに対する歴史解釈をめぐる論争を学び、論争の中で光をあてられはじめた新しい歴史的事実をできるだけ斉合的に位置付けられるような政治学的なモデルをつくること」（北大法学部研究年報、第一号、一九八二年、八一頁）を課題としていたという。その内容は、後日公刊され、おそらくは問題意識も微妙に変化したのちの帝国主義関係の論文（一九八五a b、一九九〇b、一九九四c、二〇〇三a）から推察するしかないが、イギリスの帝国史研究とJ・A・ホブソンの理論枠組を下敷きに、国内労働者への価値分配の希薄さと（ときに「うわの空」で非自覚的に行われる）国際金融資本による植民地進出とがセットで進行するさまを描いたものと思われる。

その意味で、中村教授の保持していた講座が、国際政治であっても、その研究対象は端から国家間関係に限定されず、逆に内

外政を貫くグローバルな世界政治であったということもできよう。その視線の先には、冷戦のさなかにあつてヴェトナム戦争を戦うアメリカがあつたろうし、その帝國的権力が日本を含めた他国にどのように浸透しているのかを見極める作業とも重なつていたに違いない。ただし、中村教授の分析は、ある種迂回し、その前の世紀の世界権力、すなわちイギリス帝国に向けられる。

当初、助手論文に沿って、歴史篇と理論篇の二部にまたがる帝国主義論を構想していた中村教授はまず、一九世紀半ばのセポイ大反乱時のインド総督チャールズ・キャニングに関して、大きな歴史論文（一九八五a b）を仕上げた。これは、帝国主義の統治リーダーシップがどのような精神構造の下で行われ、どんな限界を伴ったかを歴史的に検討することで、イギリス帝国の支配様式を余すことなく描き出そうという試みである。どことなく中村教授が師事した坂本義和東京大学名誉教授の傑作、メッテルニヒ論（「ウィーン体制の精神構造―メッテルニヒの思想的特質」『政治思想における西洋と日本（上）』東京大学出版会、一九六一年、一二九―一六八頁）を彷彿させるが、ともあれ中村教授の構想された歴史篇は、この反乱時の統治リーダーシップと、同時期に飢餓に直面した現地植民統治組織

の実態の双方を分析するものであったと思われる。この論文を境に、徐々に理論に重点を移して行ったように見受けられる。

その理論的検討の最もシャープな表現は、「帝国と民主主義」(一九九四c)であろう。二度目のオックスフォード長期滞在時に練られたこの大論文は、一方で、「帝国」という世界大の権力的浸透過程を見据え、それと一国民主義との間に生ずる乖離を問題として可視化し、世界大の民主主義を仮構するきわめてユートピア的な論考である。他方それは、グラムシのヘゲモニー論を援用し、帝国の本質的特徴を「指示的権力(indicative power)」と喝破した。これにより、中心⇄周辺構造が再生産されるメカニズムを、指示するための諸資源(軍事力・経済力)、回路(広義のメディア・交通体系)、内容(モデルとなるような市場・自由・民主主義)の観点から体系的に把握し、同時に一九世紀以降の英米世界権力を通史的に語る道具立てを獲得したのである。

2 平和は可能か

この帝国主義研究と並行し、早くから行われたのが平和研究であり、またその視座に依拠した論壇活動である。

中村研一教授は、助手時代に平和研究の方法論について執

筆したのを皮切りに(一九七六)、北大に赴任してからは、日本における平和論の系譜をたどり(一九七八a、英語論文 *World*)、国際平和研究学会の研究動向を紹介・考察しながら(一九八〇、一九八二c d)、非武装中立論の現代的意味、平和を担う市民の役割、平和と人権の関係を問い直している(一九八三a、一九八四d、一九八六a)。後年との関係で付言すべきは、この早い段階から研究動向紹介という形で、グローバルな視座を打ち出していることだろう(一九八二c)。

一九八〇年代前半のこの時期は、一九七九年のソ連によるアフガニスタン侵攻を経て米ソ新冷戦が激化していた時期であり、また同時に日本の大国としての台頭が明らかになっていたころでもある(七九年にはE・ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が刊行された)。いずれも、平和研究の問題として意識されたのは間違いないことである。

当時の日本では、いわゆるソ連脅威論が幅を利かせ、軍拡への足音が大きくなっていった。シーレーン防衛が争点となり、日米安保体制が明示的に「同盟」として意識され始めたのは一九八〇年代初頭の鈴木善幸内閣の頃であり、のちに中曽根康弘内閣(一九八二―八七年)が軍事費のGNP1%枠を撤廃するのは一九八六年だった。それに対し中村教授は——非常に特徴的

なことだが——言説のもととなる事実を直視し、脅威論のもととなるソ連の軍事力が極東において低下してきている傾向を実証的に指摘した上で、日本における「ソ連嫌い」のイデオロギーを分析した（一九八五c d、1983）。

並行してなされたのが、日本の軍事化を、先進国へのキャッチアップに伴う開発独裁ないし権威主義体制との関わりで、韓国、東南アジア諸国、イランなどにも適用可能な、従ってより世界的文脈、かつ（再び）内外政を貫く視点から把握しようとした学術的な試みである（一九八二a b、1981、1986）。しかし、やや外在的なその試みが長続きしたとはいえない。むしろ、それまでの帝国研究を踏まえ、日本の大国化が、軍事的含意をもつものの第一義的には非軍事的手段である経済浸透の形をとり、無自覚的に「うわの空」で進行する傾向を指摘した論文が目を引く（一九八六b）。

また中村教授は、赴任地として北海道が新冷戦の最前線であることを見逃さなかった。憲法学における平和研究の権威である深瀬忠一北海道大学法学部（現名誉）教授と経済学部の森杲（現名誉）教授を担ぐ形で組織されたシンポジウムは、その新冷戦を分析し、発展の形を見直し、アイヌの位置づけを問うことで、北海道から総合的に平和を構築する道筋をつけようする

中村教授の初めての編著となった（一九八八a）。

これらの平和研究の試みは、いわば原論としての平和論に昇華する。それが、宇沢弘文東京大学教授が主導した岩波講座『転換期における人間』所収の論考『平和は可能か』である（一九八九a。二〇一〇に再録）。これは、国家、南北問題、差別（アバルトヘイト）、NGOを論じたいくつかの関連論考とともに、内外にまたがる国家の暴力性を問い、社会が国家から世界政治の制御を回収するための民主主義の深化を示唆するものとなっている（一九八九c、一九九〇a、一九九二、一九九六）。

3 地球共和政賛歌—認識と変革

こうして、中村研一教授のまなざしは、しだいに世界政治の構造的な矛盾、乖離、裂け目、空洞に向かつていった。グローバル化は不可避で、地球全体を包む相互作用や因果関係は深まる一方なのに、その共同性や制度枠は欠如したまま。それぞれどこか、世界的なヘゲモニーは、人類的な共感や道議の育成を妨げる。この構造的な矛盾は、南北問題と括られてきた中心⇨周辺のないの乖離と重なる。のみならず、国内においては立法・正統性メカニズムと政策・行政過程とが、また国際的には重層的な政策決定と主権の国家独占とが裂けゆく。

このような視座は既にヨーロッパ統合を体系的に論じた論文「ヨーロッパは政治共同体たりうるのか」(一九九四b)において萌芽的に現れているが、そうした裂け目から吹き出すリベラルな地球政治のダイナミズムを本格的に扱ったのが、主著『地球的問題の政治学』(二〇一〇a)である。

このいわば地球政治の原論は、解決し発明する人間像を基底にもつ。具体的には、地球的問題解決に向けて、共感を醸成し、協力する回路の発明に参加する市民的徳が人間には本来的に備わっていると(三四二頁以下)。ただし、そうした個人・市民と地球は無媒介には接続されえない。「地球」は膨大で、制度化されておらず、逆に国家は強力で、個人や市民は直接に地球の構成員とみなされてこなかったからである(三一九頁以下)。

そこで、問題を認識し、解決に向け一步を踏み出すことこそがその両者をつなぐのである。ここでは、「知る／識る」という行為が「変える／変革する」とこと表裏一体となる。こうした中村教授の認識・変革論は、本書にさかのぼること二〇年、ホブソン・レーニンの政治認識分析の中に鮮明に現われている(一九九〇b)。

したがって、本書はまず第I部で、問題を「知る／識る」こ

とを重視する。取り上げられているのは、感染症、人口増加、飢餓・貧困、資源枯渇、環境破壊、移民・難民、そして核である。一九七〇年代にエネルギー問題をとり上げ(一九八四b)、帝国主義研究の現場検証でカルカッタの飢餓を検討して以来、これらの地球的問題のほとんどは、中村教授が一つ一つ積み上げるように分析してきたものである。かねてから温めてきたマルサス論も、ここで初めて登場している。これらは、最現代で「国際政治」という学問分野を語る際に要請される、いわば肺活量の大きさを示すものであろう。同時にそれらはすべて、国家間政治の視座に委ねても解決はおろか認識すら難しい問題であり、その認識そのものが個人と地球とをつなぐよう設計されている。

第II部は、主体や方法が検討され、国際政治から地球政治への認識パラダイムの変換が試みられる。全体的イデオロギーとして国家主権は、①その要件が伸縮自在であり、②相互承認のメカニズムを通じて支えられており、③領域外の枠組み(による国家の共同救出)を本質的な特徴としているゆえに、強靱であるとする(三五二頁以下)。その主権は終わっても、次に来たるものが不明な現況を中村教授は「ポスト主権状況」と呼び、①不可避なグローバル化、②地球的問題の危険認識、③モダニ

偵』であった(二〇〇九a)。

ふだんの中村研一教授の会話に理想主義的な言説は少ない。むしろ、現状を見極める際の透徹した現実主義(リアリズム)に驚かされることのほうが多い。鋭利な現状分析と現状変革の構想。あるいは現実主義と理想主義。この二つを結ぶのは、羊が人を食い殺す現状をばねに「どこにもない世界(ユートピア)」を描いたT・モアのユートピア的思考なのである。その意味で、中村教授は卓抜したユートピア論者であった。

5 市民・若者向けの教科書・事項解説・論説

他にも特筆すべきなのが、市民や若者向けの出版活動である。中村教授は、早くから高校教科書『現代政治経済』作りに力を入れ、のちには中学生向けの『新中学校公民』を監修している(以下の業績欄7)。また、『平凡社大百科事典』『岩波社会思想事典』『朝日キーワード別冊・国際』などで鍵となる国際政治用語を解説したほか、一九九〇年から二〇〇七年まで、『朝日現代用語集 知恵蔵』の国際政治欄を坂本義和東京大学名誉教授と共同で執筆している(業績8)さらに、多くの論説記事を新聞・雑誌等に寄稿し、学内のみならず広く社会に向けて発信を続けた(業績9)。相当な時間とエネルギーがこれらの作品

群に注がれたという事実は、中村教授の学問が市民に向けられていたことを物語る。

二 教育業績

中村研一教授は、着任以来、北海道大学法学部における講義「国際政治」(四単位)をほぼ一貫して担当した。この講義は、独特の講義スタイルとも相まって、大変な人気講座であった。また、一九八〇年代に創設された全学教育総合科目「平和の学際的研究」においては、二単位一五コマ中三回を他のスタッフと分担し、本学における平和教育の一端を担われた。なお、数年にわたり、教職課程教科教育法「公民科教育法」(二単位)の一五コマ中五コマを担当した。加えて、後年、新入生向けの「政治学入門」を数年間担当された。この間、相当政治学のあり方、伝え方を再考されたようで、その講義録は北海道大学出版会から後日出版予定となっている。

二〇〇五年の公共政策大学院の設立後は、「国際公共政策」(二単位)を毎年開講してこられた。この講義録は、おもに研究業績3(右記)で述べた『地球的問題の政治学』(二〇一〇)の

第一部となつて公刊されている。

また、学部や大学院演習では、原書を輪読する古典的なものから、実務家を招聘する実験的なものまで、幅広く担当された。外書講読においては、英語だけで進めたり、英作文を取り入れるなど、多くの試みを実践されている。

中村教授は教育熱心で知られ、直接間接を問わず薫陶を受けた研究者は数多い。ご自身が指導された博士論文は、韓国朴正熙時代の開発独裁と民主化、陸羯南の政治思想、日露戦争時の謀報戦、戦間期ポーランドの政治家ドモフスキー、経団連と日中経済関係、現代北朝鮮の経済改革にいたるまで幅広いトピックスを扱っており、教え子の国籍は、日本はもとより、韓国、台湾、米國、中国など多くの国にまたがっている。

他にも、実に多くの大学で非常勤講師を務められた。詳しくは、第五節の経歴欄を参照されたい。

三 学内外の行政上の業績

多くの人が認めることだろうが、中村研一教授の行政能力は抜きん出ている。それに周りは頼り切つてしまうほどである。

北海道大学法学部で広報委員を務められた中村（当時助）教

授は、それまでの広報誌のあり方に満足せず、ファカルティや学生の声を集めたアンソロジー『北大法学部を読む』を編み、世に投げかけた。一九八七年三月三十一日付の『朝日新聞』「大学案内を作つてみて」は、中村教授が北大法学部広報委員として執筆し、北大法学部長名で公表したものである。その後、『北大法学部を見る』というプロモーションビデオも制作された。二度目の英国留学から帰国されたのち、教務委員をはじめ多くの重責を担われた。そして（思いがけず）四九才の若さで、一九九六年に法学部長に選出された。「民主主義は恐ろしい」が本人の弁である。

法学部長として取り組まれたことの中で、特筆すべきことが少なくとも二つある。一つは、いわゆる大学院重点化である。東京大学法学部から始まったこの潮流は、ポストと予算に直結した。現在は当たり前のようになってはいる様々な制度的前提の多くはこの時つくられた。具体的には、法学部から法学研究科に重点が移り、専門的職業人を育てる専修コースと研究者養成コースが分けられ、附属高等教育研究センターが設立された。もうひとつは、『北大法学部ライブラリー』全六巻刊行の総合指揮を執つたことであろう。

全学の執行部への誘いを、三度目の英国滞在で断ち切つたの

も束の間、法学研究所所属の中村睦男教授を北海道大学総長に選出する際に事実上選挙対策責任者を務め、総長選出から若干の時間差はあったものの、二〇〇三年から北大理事・副学長に就任された。二〇〇五年までの任期中、企画、広報、国際関係、留学生センターを一手に掌り、法人化の指揮を執った。また、全国初の文理融合型の専門職大学院である公共政策大学院の立ち上げを主導され、離任後はそこで研究教育に携われた。

その公共政策大学院で院長をすることになろうとは、大学院立ち上げのときには想像しておられなかったかもしれない。退職直前の二〇〇九年から一一年はその院長職にあり、ご自身曰く「三度目の赤紙」召集に応じられた。

他方、学外の行政とは距離を置いておられたように思われる。東京大学法学部時代にすでに国家公務員採用上級甲種試験に合格し、当該年の通商産業省入省予定者の行政職トップに位置し、一度は資源エネルギー庁長官を夢見たはずの中村研一教授は、いったん研究人生に入り、ある種オポジション側で学問に従事するようになる、政府や霞が関との接触を極力避けるようになったようである。

それでも、例外はある。一九九六年に設置された環境庁の「水環境に係る有害物質懇談会」の検討員を務めたのがそれに当た

る。そして、もう一つは、厳密には民間のものであるが、二〇一一年に設置にいたった、北海道電力の「プルサーマル公開シンポジウム等に関する第三者委員会」の委員職である。

四 経歴

一九四八年一月三日 神奈川県藤沢市生まれ

一九七二年三月 東京大学理学部物理学科卒（原子核理論、情報理論）

一九七三年九月 国家公務員採用上級甲種試験（行政）合格

一九七四年三月 東京大学法学部政治コース卒業（政治学）

一九七四年四月～一九七七年八月 東京大学法学部助手（国際政治）

一九七七年九月 北海道大学法学部助教授（国際政治）

一九七八年～八〇年 国際文化会館新渡戸フェロー、英国オックスフォード大学セントアントニーズ・カレッジ研究員（この間

および後、一九七九年～二月～八〇年二月インド社会発展研

究センター上級研究員、一九八〇年六月～八月米国スタンフォード大学フーバー研究所客員研究員、一九八〇年八月メ

キシコ国立自治大学客員研究員)

一九九〇年三月 北海道大学教授(国際政治)

一九九〇年～九二年 英国オクスフォード大学セントアント

ニーズ・カレッジ上級研究員

一九九六年二月～一九九八年二月 北海道大学法学部長

一九九九年～二〇〇〇年 英国ケンブリッジ大学クレア・ホー

ル客員フェロー(二〇〇〇年～現在 同生涯メンバー)

二〇〇三年一月～二〇〇五年五月 北海道大学副学長・理事

(企画、国際、広報、評価担当)・留学生センター長

二〇〇五年四月～二〇一一年三月 北海道大学公共政策大学院

教授(国際公共政策)

二〇〇九年四月～二〇一一年三月 北海道大学公共政策大学院

長

二〇一一年四月～現在 北海道大学大学院法学研究科教授(国

際政治)

○非常勤講師(カッコ内は年度・単位数)

東京都立大学大学院法学研究科(一九八〇・二単位)、北海

道教育大学釧路分校(一九八三・二単位、一九九三・二単位)、

北海道教育大岩見沢分校(一九八三・二単位、一九八七・二

単位)、信州大学経済学部(一九八五・二単位)、北星学園大

学経済学部(一九八六・四単位)、成蹊大学法学部(一九八七・

二単位、四名で分担)、北海道教育大学札幌分校(一九八八・

四単位)、山形大学人文学部(一九八八・二単位)、札幌学院

大学法学部(一九九〇・三単位)、東北大学法学部(一九九三・

四単位)、藤女子大学(一九九三・四単位、一九九四・四単

位)、岩手大学大学院教育学研究科(一九九六・二単位)、千

葉大学法経学部(一九九五・四単位、一九九六・四単位)

五 業績一覧

1 単著書

二〇一〇a 『地球的問題の政治学』岩波書店(五一二頁)

2 編著・共著書

一九八四a 『国際政治—人類社会の現在と未来』(大西仁、高

橋進と共著)、東研出版

一九八八a 『北海道で平和を考える』(深瀬忠一・森泉と共編)、

北海道大学図書刊行会

一九九四a 『ヨーロッパ統合の脱神話化』(佐々木隆生と共

編)、ミネルヴァ書房

3 論説等

- 一九七六 「方法論シンポジウムにおける争点の諸形態」(関寛治と共著)『平和研究』一〇号、三月、五二―七七頁
- 一九七八 a 「戦後日本の平和論」(高橋進と共著)『世界』六月号、二〇二―二二五頁
- 一九八〇 「世界軍事秩序の研究動向―イブラ第三回総会報告」『平和研究』五号、九月、一六二―一六五頁
- 一九八二 a 「日本の軍事化」(大西仁・高橋進・鈴木祐司との共著)、坂本義和編『暴力と平和』朝日選書、一五五―二二一頁
- 一九八二 b 「軍事化を許容する政治構造」『エコノミスト』一月二五日、一〇―一六頁
- 一九八二 c 「グローバルな視座とパラダイム転換―IPRAの平和研究の動向から」『平和研究』第七号、五月、一三―一三九頁
- 一九八二 d 「ポスト軍縮総会の課題」『世界』八月号、四二―五三頁
- 一九八三 a 「民衆による平和」『法学セミナー増刊 憲法と平和保障』五月、一八八―一九六頁
- 一九八四 b 「エネルギー問題を考える」『国際政治―人類社会の現在と未来』(大西仁、高橋進と共著)、東研出版、四七―八八頁
- 一九八四 c 「連合の安定と変動―数理モデルによる考察―」篠原一編『連合政治Ⅱ―デモクラシーの安定を求めて―』岩波現代選書、三三三―四一三頁
- 一九八四 d 「非武装中立論の真の課題」『世界』一月号、七六―八三頁
- 一九八五 a 「帝国主義の統治理性―チャールズ・キヤニングとインド大反乱Ⅰ」『北大法学論集』三六卷一・二合併号、二八七―三二三頁
- 一九八五 b 「帝国主義の統治理性―チャールズ・キヤニングとインド大反乱Ⅱ」『北大法学論集』三六卷三号、一〇―一三二頁
- 一九八五 c 「ソ連脅威論からの脱却」『世界』四月号、五六―七三頁
- 一九八五 d 「ソ連・好きと嫌いの向こう側」『広告批評』七月号、五二―五九頁
- 一九八六 a 「転換期の人権と平和」日本平和学会編『講座平和

- 和学Ⅳ 新国際秩序と平和』早稲田大学出版部、九三―一二
 七頁
- 一九八六b 「国家の変容―日本の大國化」『法学セミナー増刊
 国際政治 戦略と平和』二月、七三―八二頁
- 一九八七 「北海道の課題と横路道政の課題」(荒井信雄と共著)
 『地方自治通信』二一一号、六月、一五―二二頁
- 一九八八b 「はじめに」『北海道で平和を考える』(深瀬忠一・
 森泉と共編著)、北海道大学図書刊行会、i―ix頁
- 一九八九a 「平和は可能か」宇沢弘文・河合隼雄・藤沢令夫・
 渡辺慧編『岩波講座・転換期における人間』5 国家とは』岩
 波書店、二九七―三四一頁
- 一九八九b 「社会の鏡としての天皇」『世界』三月号、四四―
 五四頁
- 一九八九c 「白人 要塞 政権の強さの秘密」『朝日ジャーナ
 ル』九月二二日号、九〇―九四頁
- 一九九〇a 「国家と暴力―権力国家観からの脱却」田中浩編
 『現代世界と国民国家の将来』御茶の水書房、一一九〇―一
 二〇七頁
- 一九九〇b 「政治認識としての帝国主義論―ホブソン、レー
 ニンの帝国主義論の再検討(一)」『北大法学論集』四〇巻五・
 六合併号下巻、一〇五三―一〇九〇頁
- 一九九〇c 「抵抗政党から対抗政党への処方箋」『朝日ジャー
 ナル』七月二〇日号、二二―二四頁
- 一九九一a 「サダム・フセイン政権の戦争観」『世界』四月号、
 一三三―一三九頁
- 一九九一b 「新しい「安全」観の共有を」『朝日ジャーナル』
 四月一九日、二二―二三頁
- 一九九一c 「中東における平和の条件」『世界』六月号、二四
 一―二五七頁
- 一九九二 「NGOの可能性―国家主権を超える―」『世界』
 八月号、一三〇―一四二頁
- 一九九四b 「ヨーロッパは政治共同体たりうるのか」『ヨー
 ロッパ統合の脱神話化』(佐々木隆生と共編)、ミネルヴァ書
 房、三三―九五頁
- 一九九四c 「帝国と民主主義」坂本義和編『世界政治の構造
 変動』1 世界秩序』岩波書店、一八三―二四三頁
- 一九九六 「世界政治と市民」『平和研究』二〇号、六月、六
 一―二二頁
- 一九九八 「南北問題の解決のために―NGO台頭の政治的
 文脈」深瀬忠一・杉原泰雄・樋口陽一・浦田賢治編『恒久世

- 界平和のために―日本国憲法からの提言』勁草書房、三九二―四二二頁
- 二〇〇〇 「領域国家の終焉―グローバル化ポスト主権状況」小川浩三編『北大法学部ライブラリー6 複数の近代』北海道大学図書刊行会、二八三―三三七頁
- 二〇〇三 a 「帝国主義政治理論の誕生―ホブソンの戦争批判と自由主義批判」、『思想』九四五（帝国・戦争・平和）特集号、一月、二七―四六頁
- 二〇〇四 「ポスト軍事主権の平和構想―E・H・カー安全保障論の再検討―日本平和学会編『グローバル時代の平和学』2 戦争廃絶への道』法律文化社、二四四―二六九頁
- 二〇〇五 「帝国を抱きしめて―世界権力と民主主義の将来」『帝国／グローバル化時代のデモクラシー』（ロナルド・ドーア、田中秀征、ゲリー・ガーストル、遠藤乾と共著）、北海道大学外学院法学研究科附属高等教育研究センター、七六一―八九頁
- 二〇〇七 「テロリズムの定義と行動様式―日本比較政治学会編『テロは政治をいかに変えたか』早稲田大学出版部、一三一―一五二頁
- 二〇〇八 「暴力と権力」辻康夫、松浦正孝、宮本太郎編『政治学のエッセンシャルズ―視点と争点』北海道大学出版会、八三―九七頁
- 二〇〇九 a 「テロリズムのアイロニー―コンラッド『密偵』の表象戦略』『思想』一〇二〇（暴力・連帯・国際秩序）特集』号、四月、二八―五一頁
- 二〇一 a 「主権のゆらぎ」杉田敦責任編集『政治の発見7 守る』風行社、七〇―一〇一頁
- 二〇一 b 「リスボン地震と神の退場』『文学』（岩波書店）、八・九月号、二二二―二三二頁
- 4 解説・書評（新聞書評欄を除く）
- 一九七八 b 「書評 坂野潤治『明治・思想の実像』」『創文』三月号、一八一―二二頁
- 一九八二 e 「書評 ジョナサン・シエル『地球の運命』（朝日新聞社、一九八二年）』『朝日ジャーナル』一〇月一五日号、六四―六五頁
- 一九八三 b 「総合書評 毎日新聞社軍縮取材班『軍縮―平和とは何か』築地書館、一九八三年等九冊の総合書評』『平和研究』第八号、一四八―一五一頁
- 一九九 a 「理想的な悪夢 書評 黄長火華『黄長火華回顧

録・金正日への宣戦布告』『しゃりばり』六月号、五八―五九頁

一九九九b 「遊撃隊国家の終焉 書評 和田春樹『北朝鮮・遊撃隊国家の現在』』『しゃりばり』七月号、五〇―五一頁

一九九九c 「夢の残骸―金日成のあやつり人形 書評 高沢白告詞「宿命」『よど号』亡命者たちの秘密工作』『しゃりばり』八月号、四六―四七頁

一九九九d 「今、安保とは何か 書評 船橋洋一『同盟漂流』』『しゃりばり』九月号、五六―五七頁

二〇〇三b 「いかなるテロ対策が望ましいのか 書評 宮坂直史『国際テロリズム論』』『平和研究』二八号、早稲田大学出版部、一月、一七九―一八一頁

二〇〇九b 「総合書評 坂野潤治『日本憲政史』―戦前デモクラシーにおける憲政の構造―』『北大法学論集』五九巻五号、

二九―三二頁

二〇一〇b 「解説 坂野潤治『日本政治「失敗」の研究』講談社学術文庫、二六六―二七八頁

5 英語公刊論文

1978 “The North-South Problem in East Asia”, *Peace Research*

in Japan 1977-78 (Tokyo, The Japan Peace Research Group), pp. 45-51.

1979a “Peace Research in Postwar Japan” (with Susumu Takahashi), *Peace Research in Japan* 1978-79 (Tokyo, The Japan Peace Research Group), pp. 7-34.

1979b “Peace Studies in Postwar Japan”, Gordon Daniels ed., *The Proceedings of the British Association for Japanese Studies*, Vol. IV, Centre for Japanese Studies, University of Sheffield, pp. 160-171.

1981 “Militarization of Post-War Japan”, *Bulletin of Peace Proposal*, Vol. 13, No. 1, pp. 31-37.

1983 “Soviet Threat Theory”: Pseudo-image and Real Problems”, *Peace Studies Association Newsletter*, September, pp. 1-4.

1986 “Militarization of Post-War Japan”, Yoshikazu Sakamoto ed., *Asia: Militarization and Regional Conflicts*, London: Zed Books, 1989, pp. 81-100.

2011 “Energy Crisis as Global Problem”, *Annals, Public Policy Studies*, No.5, 2011, Hokkaido University, pp. 163-188.

6 翻訳・構成

シルビア・ブルカン「ルーマニアと世界平和」『読売新聞』一九七五年一〇月一四日

アロンゾ・L・ハンビー「二〇世紀アメリカの戦争と社会」小川晃一・石垣博美編『戦争とアメリカ社会』木鐸社、一九八五年、二五―六〇頁

リチャード・フォーク「西欧国家システムの再検討」坂本義和編『現代世界政治の構造』1 世界秩序』岩波書店、一九九四年)、六三―一〇八頁

チャドウィック・アルジャー「地域の国際化」『地域・自治体国際化の可能性』『地方自治職員研修』一九八八年臨時増刊号、三九―四九頁

J・マツィーラ「黒人たちの忍耐は限界を超えた」『世界』一九八八年九月号、一六二―一七一頁

ジョゼフ・ロートブラット「なぜ私はマンハッタン計画を離脱したか」『世界』一九九〇年九月―二月号(大西仁、高原孝生、藤原修と共訳)

デビッド・ブライヤー「リスクを冒して賭け、信じて委ね、やり通す」OXFAM代表に聞く『世界』一九九二年八月号、一六―二二九頁

ジェイソン・バーク「九・一一事件にいたる道」『論座』二〇〇八年四月号、三八―四二頁

「J・A・ホプスン 解題と資料」川崎修・杉田敦編『西洋政治思想資料集』(法政大学出版局、二〇一二年近刊)

7 教科書

『現代政治経済』(文部科学省検定高等学校教科書、吉川洋他計一二名による共著)、清水書院、一九八四―二〇一一年度(全体監修、序章・第三編第二章(共著) および第一編第六章「国際政治と日本」(単著))

『新中学校公民』(文部科学省検定中学教科書、岡崎哲二他一〇名による共著)、清水書院、二〇〇〇―二〇一一年度(全体監修および第三編「国際政治を生きる」(共著))

8 事典・用語集

A 『平凡社 大百科事典』(平凡社、一九八五年)「帝国主義」
「植民地」「植民地主義」
「国際海峡問題」

B 『朝日現代用語集 知恵蔵一九九〇』
『同二〇〇八』朝日新聞社、一九八九年―二〇〇七年、「国際政治」のセクションを坂本義和と共著。なお、一九九一年版以降、一九七六年

以降の「世界主要紛争」一覧を作成・分類。

「単独行動主義」「ミサイル防衛」「環境外交」「ジェノバサミット」「世界問題／地球的問題群」「世界政治・地球政治」「世界システム」「世界システム論」「グローバル化」「グローバルズム」「グローバル・ガバナンス」「グローバル・ガバナンス委員会」「地域主義（リージョナリズム）」「相互浸透」「相互依存」「政策協調」「トランスナショナルな関係」「摩擦／国際摩擦」「メディア・パワー」「持続可能な開発（サステイナブル・デベロプメント）」「民際外交」「国家システム／主権国家システム」「ウェストファリア体制」「権力政治（パワー・ポリティクス）」「安全保障」「集団安全保障」「国連の介入」「人道的介入」「同盟の再定義」「エンゲージメント（関与政策）」「中心／周辺」「準周辺、周辺のなかの中心、周辺のなかの周辺」「ヘゲモニー／覇権」「国際レジーム（レジーム）」「連邦」「国家連合」「国際統合」「不戦共同体、地域統合」「民族紛争」「民族浄化（民族純化）」「民族／エスニック・グループ」「ナシヨナリズム」「テロリズム」「反テロ・サミット」「国家テロリズム」「ならず者国家」「低水準戦争」「構造的暴力」「ガルトウング」「解体国家」「軍事化」「軍国主義」「軍産複合体」「軍事援助」「核時代」「冷戦」「ブロック・圏」「両

極システム」「二極システム」「多極化」「第三世界」「非同盟」「非同盟国首脳会議」「新国際経済秩序（NIEO）」「新世界秩序」「中堅国家／ミドル・パワー」「ポスト冷戦」「平和の配当」「民主化運動」「文明の衝突」「文明の和解」「平和研究」「地球市民」「軍縮」「軍備管理」「軍縮会議／ジュネーブ軍縮会議」「国連軍縮特別総会」「国連軍縮委員会」「国連軍縮会議」「核抑止」「相互確証破壊」「先制不使用」「信頼醸成措置」「偶発核戦争」「警戒態勢解除」「兵器拡散」「核不拡散条約（核拡散防止条約 NPT）」「消極的安全保障・積極的安全保障」「核不拡散条約再検討会議」「検証・査察・保障措置」「ミサイル関連技術輸出規制（MTCR）」「国連通常兵器登録制度」「小型武器規制」「ワッセナー協約」「包括的核実験禁止条約（CTBT）」「未臨界核実験（臨界前核実験）」「部分的核実験禁止条約（PTBT）」「兵器用核分裂物質生産停止条約（カットオフ条約）」「ABM条約（ABM制限条約）」「戦略兵器削減条約（START）」「中距離核戦力条約（INF条約）」「化学兵器禁止条約」「遺棄化学兵器」「生物・毒素兵器禁止条約」「対人地雷全面禁止条約」「反核・平和運動（核軍縮運動・核廃絶運動）」「原水爆禁止日本協議会（原水協）」「核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）」「原水爆禁止日本国民会議（原

- 水禁」「日本原水爆被害者団体協議会（被団協）」「CND」
「ハーグ平和スピール」「ラッセル・アインシュタイン宣言」「核
戦争防止国際医師会議」「非核地帯（非核兵器地帯）」「非核
地位」「非核自治体」「神戸方式（非核神戸方式）」「高知非核
条例案」「新アジェンダ連合」
- C 『国際協力事典』アルク出版、一九九〇年。「戦後世界秩序」
「平和研究」「パルメ委員会」「ストックホルム平和研究所」「日
本平和学会」
- D 『朝日キーワード別冊・国際』朝日新聞社、一九九六年。「国
際政治」欄三〇―五一頁、「サミット」「民族紛争」「ポスト
冷戦」「新世界秩序」「安全保障」「集団安全保障」「集团的自
衛権」「よいガバナンス」「APEC/アジア太平洋経済協力
会議」以下六一項目を坂本義和と共著。（それ以外の項目は『朝
日現代用語集 知恵蔵一九九六』と同様。）
- E 『朝日キーワード別冊・国際・新版』朝日新聞社、一九九九年
「国際政治」欄三二―三五頁、Dの改訂。
- F 『国際政治事典』弘文堂、二〇〇五年。「自由貿易帝国主義」
「新帝国主義」
- G 『岩波社会思想事典』岩波書店、二〇〇八年。「愛国心」「エ
スニシティ」「戦争」「地域統合」「帝国」「ナショナリズム」
「平和」「民族自決」「連邦主義」
- 9 その他の論説・書評
『国際平和研究学会に参加して』『朝日新聞』一九八一年七月
一〇日（夕）
『台頭した核戦争を戦う戦略』『毎日新聞』（道内）一九八
一年八月一六日
『民衆脅かす軍事技術』『北海道新聞』一九八二年八月二六日（夕）
『未来構想の重視を』『北海タイムス』一九八一年二月九日（夕）
『軍拡と軍縮 二つの「常識」』『朝日新聞』（道内）一九八二
年八月一五日
『植民地の現状』『月刊百科』一九八二年八月号、四一―六頁
『書評 坂野正高「イメジの万華鏡」筑摩書房、一九八二年』
『秋田さきがけ新聞』一九八二年一〇月三日、『信濃毎日新聞』
一九八二年一〇月四日
『市民の手で軍拡を阻止』『朝日新聞』一九八三年一月四日
『広がる憲法の再発見』『北海道新聞』一九八三年五月三日
『世界に広げよう「非核三原則」の輪』『北海道新聞』一九八
三年八月一六日（夕）
『問われる知事の政治哲学』『北海道新聞』一九八五年二月一

七日

「アジア・太平洋地域非核化への道―国際シンポジウムに参加して」『朝日新聞』一九八五年四月二十五日(夕)

「横路道政この二年 道民との接触手段欠く」『毎日新聞』(道内)一九八五年五月二二日

「臨教審と大学問題」(法学会記事)『北大法学論集』三六巻四号、二四二―二四四頁

「政策づくり参加の時代」『毎日新聞』(道内)一九八六年六月二日

「市民の選択 問われる日」『朝日新聞』(道内)一九八六年七月六日

「若返り遅れた社会党」『毎日新聞』(道内)一九八六年七月八日

「1%枠突破 アジア諸国に脅威」『北海道新聞』一九八七年二月一七日

「統一地方選の意義は」『毎日新聞』(道内)一九八七年三月二四日

「大学案内を作ってみて」『朝日新聞』一九八七年三月二二日(北大法学部広報委員として執筆、北大法学部長名で公表)

「放置」か「変革」か―問われる有権者の意識』『毎日新聞』

(道内)一九八九年五月三一日

「民主主義建て直す絶好機」『北海道新聞』一九八九年六月六日

「書評 長洲一二・坂本義和編『自治体の国際交流』学陽書房」『神戸新聞』『京都新聞』一九八九年二月一九日

「山は本当に動いたか」『道新TODAY』一九九〇年五月号、二五―二七頁

「銃口 われわれに向けられていた―本島市長銃撃に思う」『北海道新聞』一九九〇年一月二二日

「安保条約の質的転換を図れ―意味失いつつある日米軍事同盟」『朝日新聞』一九九〇年六月二五日

「首長選の相乗りをやめよ」『北海道新聞』一九九〇年一〇月一三日

「犠牲強いられるイラクの民」『北海道新聞』一九九一年一月二一日(夕)

「偽りの挑戦者サダム・フセイン」『北海道新聞』一九九一年三月四日(夕)

「軍事主義傾斜の『貢献』は逆効果」『朝日新聞』一九九一年六月一四日

「スーパーマン症候群」『北海道新聞』一九九一年六月二四日(夕)

- 「統合の長期過程始まる―サミットに新たな課題」『北海道新聞』一九九一年七月一八日(夕)
- 「なぜ、まず」軍事―国連の機能改革こそ先決―『北海道新聞』一九九一年九月二五日
- 「外国ボケの効用」『朝日新聞』一九九一年九月三〇日(夕)
- 「政治家の回顧録」『朝日新聞』一九九一年一〇月一日(夕)
- 「湾岸とハリウッド」『朝日新聞』一九九一年一〇月二日(夕)
- 「逆さの国の政変」『朝日新聞』一九九一年一〇月三日(夕)
- 「ユートピア殺し」『朝日新聞』一九九一年一〇月七日(夕)
- 「オクスファム」『朝日新聞』一九九一年一〇月八日(夕)
- 「ストーリーさん」『朝日新聞』一九九一年一〇月九日(夕)
- 「国際貢献は国民の共感が必要」『朝日新聞』一九九二年七月二日
- 「豊かさを分け持つ仕組みを―英国で考えた日本の富の生かし方」『婦人の友』一九九三年二月号、六〇―六三頁
- 「エドワード・ヒースとイギリス保守政治の転換」『北海道新聞』一九九四年六月一〇日
- 「おとなが起こす戦争―いちばんの犠牲者は子ども」『ジュニア朝日年鑑一九九五・一九九六 社会「学習」』朝日新聞社、一九九五年、七七一―七九頁
- 「書評 スーザン・ジョージ『債務ブーメラン』朝日新聞社、一九九五年」『北海道新聞』『西日本新聞』一九九五年一二月二四日
- 「危険が「風」を押し止めた」『北海道新聞』一九九六年一〇月二二日、
- 「核の時代」『世界を読むキーワード 世界臨時増刊』一九九七年四月、二四―二七頁
- 「いま、なぜ軍事安保なのか」『北海道新聞』一九九七年九月四日
- 「世界の主要紛争」、中村研一「冷戦が去ったのも東の間世界中で地域紛争が続発」『週刊二〇世紀一九九九』二〇〇〇年一二月一〇日、朝日新聞社、六一八、三八―三九頁
- 「米同時多発テロと日本」『北海道新聞』二〇〇一年一〇月二日(夕)
- 「同時多発テロ」「グローバルから反グローバルへ」『朝日現代用語集知恵蔵二〇〇二』朝日新聞社、二〇〇二年一月、一三三―一三五頁
- 「難民問題」『AERAMOOK 83 平和学がわかる』二〇〇二年九月、二二―二三頁
- 「テロの権力政治と世界的対立」、「しゃりばり」二〇〇二年九月

月号、四四―四八頁

「テロとの戦争」『朝日現代用語集 知恵蔵二〇〇三』（坂本義和と共著）、二〇〇三年一月、一五二頁

「終わらないイラク戦争」『朝日現代用語集 知恵蔵二〇〇四』（坂本義和と共著）、二〇〇四年一月、一三六頁

「書評『主役交代』（北海道新聞社、二〇〇四年）」『北海道新聞』二〇〇四年六月

「世界を引き裂くイラク戦争」『朝日現代用語集 知恵蔵二〇〇五』（坂本義和と共著）、二〇〇五年一月、一二二頁

「根深さ増すテロリズム」、「誤算重ねるイラク戦争」『朝日現代用語集知恵蔵 二〇〇六』（坂本義和と共著）、二〇〇六年一月、一二〇、一二六頁

「理想の書評 書評は「偏見」を見比べる機会」『論座』二〇〇八年四月号、三六一―三七頁

「洞爺湖サミットで問う 新興国を引き込めるか」『北海道新聞』二〇〇八年六月二三日（夕）

「風刺に復興の祈り ナマズの浮世絵」『北海道新聞』二〇〇一年五月一〇日（夕）